

優秀賞

ちょっとしたお手伝い

香川県 寒川小学校 四年
藤井 博雅

ぼくは1日のうちで、おばあちゃんという時間がいちばん長い。

ぼくのおばあちゃんは、お友だちのおばあちゃんより高れいである。こしがいたい、足もいたい、あく力も落ちてきた、物忘れもひどくなった、料理の味もわかりにくいと、高れい者へとまっしぐらである。でも、ぼくたちのために、いっしょうけんめい世話をしてくれている。

そんなおばあちゃんが、少しでも楽しくやりがいを感じてすごせるように、ぼくはちょっとしたお手伝いをしている。

ペットボトルのキャップをあけるのが力不足でできないので、ぼくはさい初のかたいところだけゆるめるようにしている。

「ひろくんがしてくれたの。ありがとう。」

と、おばあちゃんのうれしそうな顔を見ると、ぼくもうれしくなる。

足がいたいおばあちゃんの代わりに電話に出ると、電話の出方が上手だと、ぼくのことをあい手の人にほめられ、おばあちゃんまでうれしくなったそうだ。注意することは、

「どなたですか。」と聞いて、おばあちゃんに伝えることだ。

バックのおき場所をわすれて、

「ひろくん、おねがい。」

と、よく言われる。なぜか、ぼくがさがすとすぐ見つかる。

「ひろくん、ありがとう。」とよろこぶおばあちゃんを見ると、もっと気をつけてあげようと思う。

『かきまぜずし』をよくつくるおばあちゃん。さいきん、入れわすれる物が毎回ある。おすを入れわすれたり、さとう、しおのどれかを入れわすれる。そこでぼくが味見をして、「おすがたりないよ。」などアドバイスをする。おばあちゃんは、「ひろくんに見てもらって、よかった。」と、ほっとしているみたいだった。この日は、ぶじかきまぜずしができて、みんなそろって楽しく食べた。

おばあちゃんが少しお昼ねをしていると気づいたら、おふとんをかけてあげたり、お買い物に行ったら重い荷物を必ず持ってあげる。

ぼくのお母さんはお仕事をしているので、おばあちゃんがかわりにぼくのめんどうを見てくれている。いつもやさしくしてくれるおばあちゃんが大すきだ。

おばあちゃんがこまっていたり、悲しんでいたりとすると、ぼくも悲しくなる。

まだぼくは体も小さくて、力もあまりないけれど、おばあちゃんのことを考えて行動することができる。ぼくのちょっとしたお手伝いや気づかいで、おばあちゃんがえがおになってくれると、ぼくもうれしくなる。

これからも気づいたら、おばあちゃんだけでなく、あい手の気持ちになって、ほんの小さいことからでもお手伝いをしようと思う。